

夏目漱石と近代日本

1. はじめに、生い立ちとともに

漱石という作家が近代日本をどうとらえ、どう生きたかということを中心にお話いたします。漱石は日本人ならば誰もが知っている国民作家であります。国民作家であるということが漱石文学の特徴を示しています。漱石と鴎外はよく比較されますが、鴎外はあまり国民作家という見方がされません。これは二人の作家を考えるうえで興味深い違いだと思います。二人は非常に対照的な作家です。それについて触れる前に、漱石の幼少期の足取りを眺めると、漱石は 1867 年に生まれています。漱石自身は明治と満年齢が同じですが、漱石自身そのことを意識しており、エッセイにもその事を書き残しています。まさに明治と共に歩んだ作家であります。反面幼少期の家庭環境には恵まれていません。8 人兄弟の 8 番目で、誕生時にお父さんは 50 代、お母さんは 40 代でした。

8 番目の末っ子と言うことであまり大事に扱われません。夜店のザルの中で泣いていたところを腹違いの姉に拾われたと言うエピソードは有名です。その後、塩原昌之助という、夏目家の書生をしていた人に 9 歳まで養子にやられます。夏目家に帰っても中々籍を戻してもらえません。籍を戻してもらえたのはようやく 21 歳の時でありました。夏目家の人間に戻っていますが、戸籍上は塩原金之助という名前でも過ごさなければならなかったのです。籍を戻す、戻さないと言ういきさつはご承知の「道草」という小説で書かれているとおりです。塩原昌之助は漱石が 39 歳ぐらいの頃に復縁を迫り、彼の家をしばしば尋ねるようになります。昨年の NHK ドラマで「漱石の妻」でも描かれていました。ご覧になった方は？ かなりいらっしゃいますね。竹中直人が養父を演じていましたが、あの不気味な感じが良かったと思います。

漱石はそのころ作家としてすでに出発していましたが、宝くじにあたったりすると急に親戚が増えるというよくある話のたぐいで、おそらく人気作家になっていた漱石の噂を聞きつけた養父が「有名人になって金があるだろうから、俺の面倒も見てくれ」と迫ったということでしょう。この関係を断ち切るのに漱石は大変な苦勞をしました。明治 39 年から 42 年にかけての出来事でした。

2・漱石と鴎外 生い立ちの違い

漱石は 9 歳から夏目の家に戻って生活する訳ですが、帰ってしばらくは自分の父親、母親が誰なのか分からない状態でした。お父さんは既に 60 歳代、お母さんは 50 歳代です、夏目家に帰った金之助は実父母をお爺さんとお婆さんと思っていたようです。女中さんからあなたのお父さん、お母さんはあなたがお爺さんとお婆さんと思っている人ですよ、言われて初めてわかったのです。このことは彼自身がエッセイに書いています。漱石は実家に戻ってからも両親から面倒を見てもらえなかったのでしょうか。だから彼らが自分の父母であることがわからなかったのです。

これに対して、森鴎外は森家の跡取り長男です。森家は代々医者で藩の御殿医でありました。鴎外は生まれた時から進む道が決まっていました。鴎外自身並外れた能力の持ち主ですから医師たるべき学問もオランダ語、ドイツ語も容易に身につけることができました。つまり鴎外は自分が進むべき道に迷う必要がなかったし、迷わず進むために必要な能力を持ち合わせていたのです。一方漱石は家庭環境からして味噌っかすの存在で、彼がとくに何になるといったことは望まれていませんでした。

3・漱石の歩む道筋

漱石は幼少期から好きなものがありました。それは漢文です。漱石は漢文の書き手、もしくは漢文の研究者に成ろうかと思っていた節もあります。しかし、漱石が選んだ道は英文学です。漱石は英文学が好きであったわけではなく、時流に合わせるため英文学を選んだのです。文明開化の時代に古臭い漢文をもてあそんでいても仕方がない。英文学を目指す前に漱石は建築家を目指した時もあったのですが、友人の米山保三郎に諫められて建築家になることを断念し英文学を選びました。しかし、漱石は結局英語能力は高いものの、英文学が好きになることはなかったようです。

英文学を理解することは出来るが、どうしても味わうことが出来ない、という違和感を感じながら英語の教師になり、イギリスに留学することになる訳です。

その経緯は有名な『文学論』の序に見ることが出来ます。漱石がイギリス留学から帰って4年後明治40年に発刊されます。「春秋は十を重ねて吾前にあり。学ぶ余暇なしとは云わず。学んで徹せざるを恨みとするのみ。卒業する余の脳裏には何となく英文学に欺かれた如き不安の念あり」これは漱石の漢文への思いと重ねて論じられます。漱石にとっては漢文なら欺かれぬ訳です。漢文は漱石にとってその世界に分け入って味わうことが出来る訳です。イギリスに留学しても英文学を味わえないのはなぜか、ということが漱石の根本にある疑問でした。

4・漱石の英文学に対する葛藤

翻って思うに余は漢籍に於いて左程根底ある学力あるにあらず、然も余は充分之を味わい得るものと自信す。(漱石は漢籍に於いて十分な素養があります)余が英語於ける知識は勿論深しと云うべからずも、漢籍に於けるそれに劣るとは思わず。(漱石の英語能力も十分なものです)学力は同程度として好悪のかく迄に岐かるるは兩者の性質のそれ程に異なるが為めならずばならず。換言すれば漢学に所謂文学と英語に所謂文学とは到底同定義の下に一括し得べからざる異種類のものたらざる可からず。

漱石が『文学論』の序に述べているのは、自分は英語も漢文の能力も大きな違いはない。しかし英文学にはどうしても親しみを感じない、ということです。これは要するに二つの文学は異質のものだからではないか。しかし漱石は英文学も漢文学もどちらも文学である。であるならば二つの文学の隔たりを超えた「普遍的原理」があるのではないかと考えたのです。それを探求するために留学の最後の年を費やしたのだと漱石は言っています。それは明治35年の事であります。「余は下宿に立て籠もりたり。一切の文学書を行李の底に収めたり。文学書を読んで文学の如何なるものかを知らんとするは血を以て血を洗うが如き手段たるを信じたればなり。余は文学は心理的に文学は如何なる必要があつて、此の世に生まれ、発達し、退廃するかを極めんと誓えり。余は社会的に文学は如何なる必要あつて、存在し、隆興し、衰滅するかを極めんと誓えり。」と書いています。

ちなみにこの『文学論』の序に述べられていることは事実ではありません。漱石の『文学論』は専門的なものなのでお読みなされた方は少ないと思います。漱石の『文学論』は内容としては英文学論です。中にはシェークスピア、ワーズワース、キーツ、などおびただしい作家の作品が引用されています。如何に漱石の記憶力が良くても、行李の中にしまい込んで引用、論述することは出来ません。文学論の前に書かれた『文学論ノート』と称される膨大な考察がありますが、『文学論』の序に述べられていることは、実はこの『文学論ノート』の方に合致しています。ここでは『文学論』の前提となる様々な論理的思索が示されています。

漱石をめぐる神話の中に、イギリス留学中に漱石がノイローゼになったとか神経衰弱になって引きこもりになったと言うお話を聞いたことがあると思います。しかし、漱石は単に下宿に引きこもっていたわけではありません。外に出る時間も惜しんで勉強をしていたのです。皆さんのお手元のレジュメ4ページにある、横書きのノートを一生懸命作っていたのです。

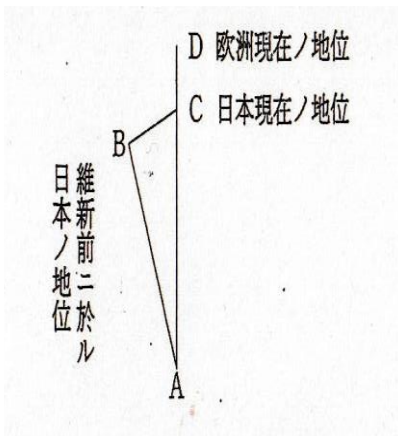
5・漱石の『文学論ノート』と時代の背景

このノートは発刊を目的としたものではありません。後の編集者がまとめて「文学論ノート」と命名されていますが、これは漱石の思索の軌跡を理解するためには貴重なものです。ここで漱石は文学に限定されない根本的なことを考えています。最初に「(1) 世界を如何に見るべき」という大問題を提起しています。「(2) 人生と世界との関係如何、人生は世界と関係なきか、関係あるか、関係あれば其の関係は如何」「(3) 世界と人生との見解より人生の目的を論ず」とか、非常に人間にとって大きな問題を考えています。ようやく8番目に「日本人民は人類の一国代表者としてこの調和に近づく為にその方向に進歩せざるべからず」と言い、11番目ぐらいに「文芸は開化に如何なる関係あるか、進化に如何なる関係あるか。」という問題が出て参ります。考察は文学や文化を哲学的、心理学的、社会学的な面から考察する内容が多いのですが、『文学論』の序に照合するように、具体的な作品は出て来ません。漱石は心理学や社会学を援用しながら、文学は人間にとって文化や社会にとってどういうものなのか、どういう意味を持つのか、とすることを考察しているのです。

この『文学論ノート』からは漱石の価値観・社会観がよくうかがわれます。開化・文明の項から引用しますと、「此の focal idea を F にて示せば $F=n \cdot f$ なり、f は一個人の focal idea を言う」という書き付けが見られます。『文学論』『文学論ノート』にはこの F と f がキーワードとしてよく出てきます。『文学論』の冒頭ではこの F は観念論的焦点 (f ocus) 、f はフィーリング (feeling) の f と言われています。すなわち文学とは観念的なものと感覚的なものが融合したものだと言っています。ですが漱石は F と f を比較的柔軟に使い分けています。すなわち F が普遍的なもの、f が個人的なものを意味する事もあります。『文学論ノート』にある $F=n \cdot f$ という等式は、国家的関心 F は個人の関心 f が n 個集合したものだということです。この等式は漱石の文学を考える上で重要なものだと思います。国民は国家的関心事を一人一人担わなくてはいけないということで、これは明治の精神そのものといつてよいものです。

『こころ』の中で先生が自殺をする時に、自分は明治の精神に殉ずると言っています。明治時代というのは、国家的関心事を一人一人が担おうとしていた時代で、大正時代はまた違いますね。大正時代は個人の関心が増大し、国家的関心が相対的に減少して行く時代です。福沢諭吉の有名な言葉「一身独立して一国独立す」がありますが、「 $F=n \cdot f$ 」という等式はこれと通じるものがあります。福沢諭吉と夏目漱石に共通しているのは、独立した個人が集積して国家が支えられるという考え方です。一方大正時代の人たちは国家と個人は別のものだと考え始めるのです。漱石については反国家的イメージもある程度あるかも知れませんが、私はこの考えに同調していません。漱石の精神はむしろ討幕派です。

漱石は江戸時代から現在までの日本の位置を左の図のように考えています。図は A から B、B から C、D となっています。漱石は A から B が江戸時代、B から C へ行くのは現在であり、A から B に行ったままでは永遠に欧州に追いつけないと言うことです。B から C へ方向転換とは明治維新のことです。明治維



新は薩長の討幕派が行ったものですが、漱石はこの大転換を評価しています。この図の説明と共に「struggle for existence (存在のための闘争)の結果は此の方向転換を余儀なくしたるものなり、吾らは此の方向転換を率先して断行せる人々に謝せざるべからず」とはっきり言っています。

私は方向転換を行った人達、(薩長の討幕派)に感謝せざるをえないと言っているのです。彼らが江戸幕府を倒して方向転換を行ってくれたから、今ではCの位置に辿りついて何とかDにいる欧州に追いつこうとしている。こういう考え方は佐幕派とは言えません。福沢諭吉もそうでした。福沢は漱石よりも二回りほど年上

で、一時幕臣を務めています、明治国家の創建を担った一人です。福沢や漱石ら明治時代の日本人は日本と自分を重ね合わせる心を持っていました。しかし、漱石が無条件に国家の体制を受容していたかというところではありません。漱石は明治日本、近代日本に対して非常に批判的でした。明治国家に対する愛着の念が批判的な眼差しにもなるのです。つまり明治日本が少しでも良くなって欲しい。まともな良い国になって欲しいという思いが、近代日本のあり方に批判的にもするのです。もちろん福沢諭吉も森鷗外もそうであったと思いますが、その思いが小説作品となって現れているところが漱石の面白いところですよ。

6・漱石の作品にみる近代日本と反功利主義・戯画化

漱石の作品は近代日本に対する愛着と批判によって生み出されている面が強く、それが漱石を国民作家足らしめています。漱石が批判を向ける対象だったのは主に二つあります。一つは功利主義であり、もう一つは帝国主義です。どちらも明治日本の潮流をなしたものです。特に功利主義に対する批判は幼少期から見られます。漱石は若い頃から文人氣質で、世俗的な事は好きではありませんでした。漱石が二十歳代に書いた『木屑録』は房総に仲間たちと旅行した時の紀行を漢文でつづったものです。まず、漢文でつづるということ自身が反世俗的ですね。内容も、食事後トランプや麻雀に興じる仲間たちの傍らで沈思黙考するというような孤高ぶりが語られています。初期作品の『草枕』には陶淵明的世界に憧れが語られていますが、こうした心性は少年時代からあったものと思われまふ。その反映か成人してからも漱石は三菱の創業者である岩崎弥太郎を嫌っていました。日記には岩崎の悪口がよく出てきます。「岩崎は家を沢山作る事には長けているが、カルチャーに関しては小児同然である」などと毒づいています。

こうした漱石の反功利主義が端的に表れているのが『吾輩は猫である』で、とくに金満家の金田一党に関する揶揄的な書き方が目立ちます。金田の奥さんがやって来ると、鼻が大きな人なので主人の苦沙弥は鼻子と綽名します。鼻子が「うちの主人はいくつも会社を持っていますの」と言っても苦沙弥は動じないし、それがどうしたという態度なので鼻子は憤慨します。漱石の反功利主義をやや戯画的に誇張して託されているのが苦沙弥です。けれども苦沙弥は無力な中学の英語教師でしかなく、その後金田一党の嫌がらせに苦しめられることとなります。世間を動かす力を持っているのは金田一党の方で、そこに単に自身の価値観を披瀝するだけではなく、現実世界のあり方を冷静に認識、表現できる漱石の作家としてのしたたかさが早くも現れているといえるでしょう。嫌なものであっても、功利主義的な資本主義国家として明治日本が展開していったという潮流自体は否定しないというリアリストとしての眼差しが『猫』に流れています。

7・作家の誕生：漱石の作品にみる近代日本

この『吾輩は猫である』を明治38年から『ホトトギス』に発表することで、漱石はたちまち人気を得て、夏目漱石と言う作家が誕生する訳です。ここで少し漱石の表現者としての前史を振り返りたいと思います。漱石はこれまでもホトトギス派の俳人として創作活動を行っていました。彼を俳句へ誘ったのはご存じのように正岡子規です。子規の手ほどきを受けて漱石は俳句の道に入ったのですが、子規とはまた違うタイプの、巧みな句を多く作っています。イギリス留学から帰国して2年後、明治38年1月に『吾輩は猫である』がホトトギスに掲載されることによって作家デビューした訳です。それまでの2年間が非常に危うい時期であった様子はNHKのドラマ『漱石の妻』に描かれたとおりです。イギリスからの帰国後は不安定な精神状態で、探偵に付け狙われていると言う幻想・幻覚にとられることもありまふ。あるいは理由もなく奥さん、子供に暴力を振るったりするDV夫だったわけですよ。奥さんが耐えられなくて実家に帰ったりすることもありまふ。離婚には至りまふんですが、危うい状況が続いてまふ。

この帰国後漱石の精神状態の悪さには、いくつか理由が想定されます。一つは漱石が倫敦から帰国するとき、それまで教授を務めていた五高（今の熊本大学）のある熊本には戻らないつもりだったこともあって、五高から一高に転任しました。めでたく東京で生活を再開することができたのです。けれども退職金を得るために五高からの転任ではなくいったん退職して一高では新規採用の形となったため、専任講師から出発ということで給与も減りました。念願の東京に戻ったのはよいのですが生活はますます逼迫状態です。それもあって周囲からの好意で漱石は東京帝大文科大学の専任講師をも務めることになったのです。ところが漱石は文科大学で教えることを予期していませんでした。これも漱石にはプレッシャーになったと思います。先ほども述べましたが漱石はイギリス留学最後の1年間は文学書を行李の底にしまい込み、もっぱら心理学や社会学の研究に没頭していました。帰国して東京に戻っても高校生に英語を教えるだけと思っていたのが、大学で英文学を教えることは想定外だったのです。文科大学にいる学生は天才気取りの文学青年ばかりです。このような連中に英文学の講義をする事になったのです。準備不足もあって当初は文科大学の学生の気に入るような講義が出来ませんでした。

漱石の授業は難しくて分からないと言って授業ボイコットまでされました。そうしたことも漱石の精神状態を不安定にする要因になったようです。その後シェークスピアの講義を始めて好評を博するようになり、教師としての面目を施すことが出来たのですが、漱石の精神状態はあまり変わりませんでした。それには外的な要因があったと考えられます。それは日露戦争の前段階となった、明治35年に北京で起こった義和団事件後の状況です。北京在住のキリスト教信者に対する襲撃が行われた事件で、西欧諸国が出兵して鎮圧に乗り出しました。日本も同盟国のイギリスに頼まれて出兵しました。イギリスは当時南アフリカでのボーア戦争に手いっぱいの状態だったため日本に出兵を依頼してきたのです。多国籍軍が北京で鎮圧を図りますが鎮圧後もロシアは撤退せず、満州に居座り続け、さらに南下しようとする気配を見せました。漱石の作品の中にしばしば「恐露病」と言う言葉が出てきますように、明治維新以来日本が描いていた最悪のシナリオは、ロシアが南下して満州を占領する、更に朝鮮を占領し、日本に攻め入ってくるというものでした。

これが実現しそうになってしまったのです。これが日本人に強い抑圧感を与えます。漱石だけでなく、一時期漱石と東京朝日新聞の同僚となる二葉亭四迷もそうでした。四迷は漱石よりももっと国士的な心性を持った人です。四迷もこの頃、精神状態が悪く、坪内逍遥に宛てた手紙で、「日本政府のやり方は全く駄目だ、ダイナマイトでも投げつきたい気持ちだ」と吐露しています。明治36年はこのような気分が日本国民の間に充満している時代でした。ところが『漱石の思い出』で奥さんの鏡子さんが語る話では、明治37年の春ぐらいから漱石の精神状態に落ち着きが見え始めたということです。春に何があったのか？まさに日露開戦です。開戦によって今までの抑圧感から解放されたのは事実のようです。

その時の漱石の心情を表すのが、悪名高い新体詩「従軍行」です。漱石らしからぬ国威発揚的な、敵を殲滅するまで兵士を鼓舞するような調子のもので、おそらく漱石の気分も高揚していたのです。そうした時に小説を書くことを勧めたのは子規の弟子である高浜虚子で、書かれたものが『吾輩は猫である』です。これは虚子たちが主催していた「山会」で明治37年の末に朗読されたものでした。それが『ホトトギス』に掲載され、作家漱石が誕生しました。経緯からすると『猫』を誕生させたのは虚子であるとともに、日露戦争であったとも言えるのです。実際猫の中には日露戦争にまつわる話が有ります。冒頭で寒月が苦沙弥の家にやってきて、「散歩でも行きませんか、旅順が陥落して外はお祭り騒ぎです」というくだりがあります。実際『猫』が掲載された『ホトトギス』が世に出たのは、明治38年の正月で、まさに旅順が陥落した時期でした。さらに『吾輩』も同年5月の日本海海戦に刺激されて、日本の猫たるところを示さねばと思ひ立ち、台所でネズミを捕ろうと奮戦するものの、一匹も取れないで終わってしまうという場面が描かれています。もちろんこれは日本海海戦のパロディであります。

このような形で日露戦争がこの作品の随所に仕込まれています。しかし、漱石は単純なナショナリストではありません。もしそうならたとえ「吾輩」にネズミを捕らせてもよいはずで、日本海海戦で

は日本海軍はバルチック艦隊に対して大勝利を収めたのですから。でも、「吾輩」は一匹も捕れない無様な姿を曝すのです。そこには日露戦争という国家的出来事を取り取り込みながらも、それを揶揄と批判をもって見つめている漱石がいます。現実の出来事を批判的に相対化しつつ、作中に描き出すという手法は処女作の『猫』にこのように見られるわけですが、次第にそれが漱石の基本的な創作の姿勢になっていきます。

『猫』の有名な書き出し、吾輩は猫である。名前はまだ無い。については、しばしば無名の猫とは漱石自身であると言われます。つづいて、どこで生まれたかは頓と見当がつかぬ。何でも薄暗いじめじめ所でニャーニャー泣いていた事だけは記憶している。とありますが、この部分も捨て子同然の育ち方をした漱石自身になぞらえることができるからです。また「名前が無い」のが、はじめて小説を書いている、無名の小説家漱石を指しているとも見ることができます。さらにそれに加えて、ここには作中人物に自分が生きている日本という国を重ね合わせる漱石独特の着想が見られます。つまりこの二行は猫になぞらえる形で、捨て子同然だった自分と無名である小説家漱石自身だけでなく、東洋の無名の小国・日本を比喩的に示しているといえます。一方ここでいう「人間」は「西洋人」に置き換えられます。冒頭部分を引用します。

掌の上で少し落ち付いて書生の顔を見たのが所謂人間というものの見始めであろう。第一毛を以って装飾されべき筈の顔がつるつしてまるで葉缶だ。加之（のみならず）顔の真中が余りに突起している。そうしてその穴の中から時々ふうふうと煙を吹く。 「吾輩」の人間観察では顔の真ん中が突起しているとありますが、これは西洋人を下から見た時の印象と近いのではないのでしょうか。漱石は背が低いことから、ロンドンにいた時に周囲のイギリス人を下から見上げた時の鼻の突起が印象に残ったのでしょうか。

次の引用です。吾輩は人間と同居して彼らを観察すればする程、彼らは我儘なものだと断言せざるを得ないようになった。という感想が述べられています。例えば白君が子猫を4匹生んだけれども、その家の書生が三日目に裏の池に4匹とも捨ててしまった。白君は涙を流して一部始終を話した上、どうしてもわれら猫族が親子の愛を完くして美しい家族的生活をするには人間と戦ってこれを掃滅せねばならないと言われた。また隣の三毛君などは人間が所有権と言うものを解していないと言って大いに憤慨している。元来我々同族間では目刺しの頭でも鰻の膾でも一番先に見つけたものがこれを食う権利があるものとなっている。もし、相手がこの規約を守らなければ腕力に訴えて善い位のものだ。しかるに彼ら人間は毫もこの観念がないと見えて我等が見つけたご馳走は彼らの為に略奪せらるるのである。彼等はその強力を頼んで正当に吾人が食い得べきものを奪ってすましている。

いくら何でも、人間が目刺しの頭や、鰻の膾を猫から奪うことは考えられません。これも比喩だといえるでしょう。日本人が見つけたものを西洋人が強奪してしまう、これは日清戦争後の三国干渉とその後の展開です。日清戦争に勝って日本は遼東半島の領有権を得ます。しかし、わずか1週間後にロシア・ドイツ・フランスの三国が日本に返還を迫った訳です。日本は戦争が終わったばかりで疲弊していますのでこの三国と再び戦う余力はありません。やむなく返還したのです。明治時代の最大の屈辱事件と言われています。返還させられたこと自体も屈辱ですが、返還要求の魂胆が見え見えだったこともあります。遼東半島のような極東にとっての要所を日本に委ねるのは危険であるというロシアなどの主張は見せかけで、本当はロシア自身が遼東半島を欲しかったからだという本音は子供でも分かることです。実際にその後ロシアは遼東半島に進出するわけです。こうした政治的な経緯を念頭に置けば、いくら人間だって、そういつまでも栄える事もあるまい。まあ気を長くして猫の時節を待つがよかろう。 という一文に込められたものも浮かび上がってきます。これはいくら西洋人であってもそう長く栄えることもあるまい。いつか日本人・東洋人が栄える時が来るだろうと読み替えることができます。実際、20世紀の後半から21世紀にかけては日本や中国、韓国など東洋の諸国が産業を隆盛させ、経済成長を遂げて西洋諸国一辺倒の世界ではなくなったわけです。

漱石作品の面白さのひとつはこのような予言が含まれている事ですね。漱石作品の予言として一番有

名なのは『三四郎』の冒頭で三四郎が、「日本は日露戦争にも勝ったし、これから繁栄するでしょう」と言う。と広田先生があっさり「滅びるね」と返す有名な科白が良く知られています。実際に日本は40年後に太平洋戦争に負けて滅びたわけですから当たっています。『三四郎』のような直接的な予言はそれほど多くありませんが、寓意的に読みとれる予言の箇所は漱石作品には沢山あって、それがほとんど当たっています。文明批判家としての漱石の凄い所です。

ちなみに日本対西洋が、人間対猫の構図になぞらえられる根底にあるものは「進化論」です。ロンドンに留学していたのはまだ進化論的な考え方の強い時代でした。まだ、19世紀の後半は進化論の時代です。人間は神が造ったのではなく、猿が進化して人間になったと言うダーウィンの考えが、教会と熾烈な戦いをしながら広まって行った時代です。進化論は使い方によっては差別の道具に利用されます。猿が進化して人間になったのであれば進化の行き着く先は白人になる。人間とは白人だけ西洋人だけを言う事になります。東洋人や日本人、アフリカ人などはまだ人間になりきっていない未開の生物と言うことになります。たとえばハーバード・スペンサーという社会心理学者の言説では、ヨーロッパ人は大人になっても知能が成長するが、オーストラリアやアフリカの土人は10才位で知能の発達が止まりそれ以上は進化しないなどと書かれています。

漱石自身、『文学論』の序で次のように言っています。倫敦に住み暮らしたる二年は最も不愉快の二年なり。余は英国紳士の間にあつて狼群に伍する一匹のむく犬の如く、哀れなる生活を営み足り。漱石は自分自身をむく犬とみなしているのです。自分を犬に見なす眼差しと猫に見立てる着想は連続しています。このような眼差しが『猫』の根底にあると言えます。面白いのは3章以降仲間の猫が出てこなくなる事です。「吾輩」は猫というよりも皮肉な知識人の観察者の眼差しで、苦沙弥や彼の家を訪れる迷亭、寒月や東風らを皮肉な観察者の目で見えていくようになります。

3章以降、「吾輩」が猫でなくなって行く二つの理由があります。一つは漱石が有名になったということです。友人への書簡で、「評判に力を得て猫も続編を書きたく候」と送っています。ここで漱石は猫が自分であることを認めています。作品の中でも人間に知己が増えてくると段々人間に近くなってきたように思えると3章に書かれています。有名になるにつれて漱石が猫から脱却して行くわけです。二つ目は日本も無名の猫ではなくなって来たことです。日本が紙一重であれロシアに勝ったことは世界を驚かせ、各地の革命運動にも影響を及ぼしました。インドにおけるイギリスからの独立運動、トルコにおけるロシアからの独立運動、あるいはロシア革命にも影響を与えています。こうした表現の変化にも、現実世界の動向が作中に映し出される漱石作品の特徴が現れています。

次に『坊っちゃん』を取り上げます。シンプルでありながら、実は奥の深い作品で、漱石のとらえる近代日本の姿がくっきりうかがわれます。親譲りの無鉄砲で子供の時から損ばかりしている。有名な書き出しですが、不思議な文章でもあります。親譲りの無鉄砲と言うのなら、親も無鉄砲でなければならぬのですが、坊ちゃんのお父さんは無鉄砲な人ではありません。ごくありふれた市民です。一方確かに坊ちゃんは無鉄砲です。数学教師として赴任した四国の中学校で色々な騒動を起こして、一年も経たないうちに帰ってきてしまいます。なぜ親譲りと言うのか古くから議論のあったところです。一つの解釈は坊ちゃんが江戸っ子と自認しているところから、「江戸」が彼の真の「親」だとするものです。しかしこの説も説明出来ない所があります。江戸は基本的に粋でいなせであることが尊ばれた時代と都市です。小谷野敦氏が言うように坊ちゃんは粋でもいなせでもなく、むしろ野暮な正義漢です。小谷野氏によれば坊ちゃんの祖先ないし源流は鎌倉武士ということになります。坊ちゃんを鎌倉武士に見立てる根拠はさほど強くないので、直ちに頷けません。坊ちゃんが戦う者であるという指摘は非常に大切だと思います。私はごく単純に考えて坊ちゃんの親は幕末の薩長だと思います。坊ちゃんは近代日本そのものです。近代日本を生んだのは誰でしょうか？ 薩長ですね。そして薩長は幕末に事実無鉄砲なことをしています。薩摩藩はイギリスと戦争しています。長州藩に至っては英・米・仏・和蘭4カ国連合軍と馬関戦争をしてもちろん負けています。薩長はこの無鉄砲な戦争によって対外的な認識を大きく

変えています。彼らは本来攘夷派でしたが、戦いを挑んだ結果、西洋列強を武力では斥けられないことを知った。そこから彼らに学ぶしかない、学ぶことで自分たちが力をつけて対抗するしかないという方向に変わっていきました。その結果が討幕であり明治維新です。漱石は基本的に薩長を肯定しています。先ほど確認したように『文学論ノート』に「方向転換をなしたるものに謝せざるべからず」とはっきり述べています。

こうした経緯を踏まうえで、坊っちゃんが近代日本であり、彼の真の「親」は薩長だと考えればこの作品は非常に読み解きやすいと思います。坊っちゃんは何故、喧嘩早いのでしょうか。この作品は明治39年、つまり日露戦争に勝利した翌年に書かれています。その時代性を考えれば坊っちゃんの敵方の赤シャツはロシアということになります。赤の広場の赤です。『猫』と同時期に書かれたこの作品にはやはり日露戦争のアナロジーが埋め込まれています。例えば3章の引用ですが、2時間目に白墨を持って控え所を出た時にはなんだか敵地へ乗り込むような気がした。「敵地」とはっきり書かれています。つまり生徒たちはロシア兵なのです。教場へ出ると今度の組は前より大きな奴ばかりである。おれは江戸っ子で華奢で小作りに出来ているから、どうも高い所に上がっても押しが利かない。ここで江戸っ子と言うのは日本人ということですね。華奢で小作りで小さい、相手は大きい奴ばかりと言っています。これは西洋人と日本人の対比そのものであります。赤シャツ自身もロシアを想起させる存在ですが、次の引用も見て下さい。一番槍はお手柄だがゴルキじゃ、と野田がまた生意気を言うと、ゴルキと云うと露西亜の文学者みた様な名だねと赤シャツが洒落た。そうですね。まるで露西亜の文学者ですねと野田はすぐ賛成しやがる。ゴルキが露西亜の文学者で、丸木が芝の写真師で、米のなる木が命の親だろう。このように作中には実際ロシアへの言及が見られます。そして見逃してはいけないのは、作品の舞台のモデルが松山だということです。作中では示されていませんが、松山はロシアに縁の深い所です。当時松山にはロシア兵の大規模な収容所があり、道後温泉は将校格のロシア兵で潤っていたのです。しかしこの作品にはロシア人が出てこないですね。時間的な舞台である明治38年には多くのロシア人が松山にいたにもかかわらずです。隠すことでこの地がロシアの比喩であることを示唆しているのではないのでしょうか。つまりロシア人を出すと逆にこの作品の舞台は「日本」に限定されてしまいますから。

うらなりとマドンナの話がサイドストーリーにあります。うらなりとういうのは坊っちゃんの「裏」にはかなりません。同僚に対して辛辣な坊っちゃんですが、なぜか彼はうらなりの悪口を言いません。第6章を引用します。俺とうらなり君とはどういう宿世の因縁か知らないがこの人の顔を見て以来どうしても忘れられない。殆ど同性愛ですね。坊っちゃんとうらなりにほとんど同性愛的感情を持っています。控え所に来れば直ぐうらなり君が眼につく、途中歩いていても直ぐうらなり先生の様子が心に浮かぶ。温泉に行くと、うらなり君が時々蒼い顔をして湯壺の中に膨れている。俺は君子という言葉は書物の上で知っているが、これは字引にあるばかりで、生きているものではないと思っていたが、うらなり君にあってから始めて、やっぱり正体のある文字だと感心した位だ。うらなりは大人しい以外何の取りえのない人に見えますが、坊っちゃんとうらなり君を絶対否定しません。それはなぜか、うらなり君がもう一人の坊っちゃんだからです。

考えてみると、日本は今に至るまで、坊っちゃんであり、うらなりであり続けたといえるでしょう。つまり経済的、軍事的に一等国のレベルになりながらも、西欧諸国には強いことが言えない。すぐに折れてしまう、そこがうらなりな訳です。坊っちゃんが山嵐と組んで赤シャツを成敗する終盤の展開はまさに日露戦争です。その前の展開として、うらなり君が赤シャツに婚約者のマドンナを奪われるという事態が起こりますが、これは日露戦争の起点となったともいえる三国干渉の比喩として受け取られます。実際日露戦争は三国干渉の意趣返しとして当時見られたわけですが、坊っちゃんとうらなりの代わりに、三国干渉の仇を取った訳です。その意味でこの作品はナショナリズム色が強いように感じますが、そこに漱石はしっかり皮肉と比喩を交えています。

つまり坊っちゃんは赤シャツとの戦いに勝ちますが、この中学から追い出されたのは坊っちゃんの方

です。中学校での赤シャツの覇権はとどまりますが、ここには日本が日露戦争に勝ったところで、国際社会の覇権の構図に変化は生じないし、日本が世界の最強国になった訳でもないという、漱石の冷静な現実認識が込められています。最後に坊っちゃんも街鉄の技師になりますが、この帰結も象徴的です。坊っちゃんは戦う者だったからです。街鉄の技師とは産業技術の担い手です。坊っちゃんは戦争の担い手をやめて、産業技術の担い手として世の中を渡って行きます。これはまさに日本が1945年以降現代にいたるまで辿った道のりと言えます。この結末も漱石の予言のひとつだと思えます。作品に盛り込まれた漱石の予言はほとんど当たっていますが、先も言いましたようにそれが漱石作品の面白い一面であります。

8. 漱石の個人主義と帝国主義批判

ここで漱石の中心的な思想ともいえる個人主義について考えてみたいと思います。漱石の初期作品には功利主義に対峙する立場が色濃く見られ、そこに帝国主義に対する批判的な眼差しが加わってきます。とくに後者の批判の根底にあるのが漱石的な個人主義で、その基底をなすものがロンドンで見出した「自己本位の境地」です。

漱石が『文学論』を構想した起点にあるものは、日本人である自分が英国人の書いた英文学を真に理解できるものだろうか、という疑問でした。私の大学にも留学生が大勢いますが、皆このような疑問を持っているようです。中国人である自分が、漱石や三島由紀夫、村上春樹を読んで果たして十分な理解ができるのだろうか？という疑問をよく聞きます。漱石も同じですが、たどり着いた結論は「出来る」でした。英国人Aと日本人Bとの間にある差異と、英国人Aと英国人Bの間にある差異は本質的には変わらない。民族的な差異よりも個人間の差異の方が大きい、ということが漱石の結論でした。

ここから漱石の「自己本位」が生まれてきます。この境地が見えた時、自分の今までの重荷が取れたと感じたのです。これが漱石の個人主義の基底になっています。個人はそれぞれの感受性の主体であり、尊ばねばならない。そして個人と国家を入れ子的に見る $F=n \cdot f$ という図式のなかで、この認識が国家レベルにも適用されることとなります。つまり感じ、考える個人が大切であるように、どんな国でも国としての自立性を尊重しなければいけないということです。漱石の帝国主義批判はここから始まっています。どの国でもそれぞれの尊さがある。力が強いからと言って相手の国の進路を妨げてはいけない、ということです。福沢諭吉は自国の結束を高めるためには、弱い国と戦うのが良いなどと言っていますが、ここに漱石と諭吉の違いが現れています。もちろんそれは二人が生きた世代の差でもあるでしょう。

こうした批判意識は具体的には隣国韓国・朝鮮との関わりに現れてきます。興味深いのは、漱石が作家として成長して行く時期と日本が朝鮮に対する支配を強める時期が重なっていることです。

漱石が職業作家になったのは明治40年4月に朝日新聞社に入社した時です。学者と作家の兼業を辞め、「小説記者」になったのです。新聞社に入社したことによってジャーナリストになったわけですが、それは形のうえだけのことでなく、漱石のなかでこの自覚が高まったと思われまます。先ほどのFとfの図式の延長として、漱石の中には「非我」と「我」という図式があります。「非我」というのは現実世界の事であり、「我」というのは自分自身の事です。明治41年の講演である『創作家の態度』の引用をご覧ください。此の態度を検するには二つのものゝ存在を仮定しなければなりません。一つは作家自身で、仮に之を我と名付けます。一つは作家の見る世界で、仮に之を非我と名付けます。是は常識の許す範囲であるから、別に抗議の出様訳がない。とあります。これは漱石が模索してたどり着いた地点です。漱石はこれ以降「我」である自分の眼差しで、「非我」である外部の事象をとらえ表現して行くこととなります。この講演の2年後の明治43年に実行されるのが日韓併合です。この出来事が漱石作品に様々な影を落として行きます。端的に表れてくるのが男女の三角関係です。漱石の三角関係が特徴的なのは三角関係を作った主人公が勝ってしまうことです。二葉亭四迷の『浮雲』や武者小路実篤の『友情』でも主人公は失恋に至ることが多い。それに対して明治42年に書かれた漱石の『それから』では、主人公代助は三年ぶりに再会した旧友の妻である三千代を最終的に奪ってしまます。さらにその続編である『門』に

おいては、主人公宗助はかつての友人の同棲者であった御米さんを奪い取って崖の下の小さな家で細々と暮らしている。なぜ、主人公が勝つのか？ これは日本が明治時代、日清戦争や日露戦争で勝ってきたことの反映です。しかし、これらの小説の主人公たちは皆、内面の空虚を抱えています。『門』の宗助はしがらない下級の官吏で、日曜の散歩にしろうじて慰めを見出しています。『ころ』の「先生」も、自分のことを「淋しい人間」とであると若い「私」に語っています。また『門』では御米さんは繰り返し妊娠するものの、そのたびに死産や流産に終わって子供をもうけることができません。『ころ』の先生夫婦も子供がなく、それが「天罰」とであると先生は言っています。

私はここに漱石の明治批判、近代批判が凝縮していると思います。『門』では御米さんが健常な子供を産めないのはなぜかということ、ある易者に見てもらおうのですが、易者は御米さんに断定するように云うのです。貴方は人に対して済まない事をしたことがある。その罪が祟っているから、子供は決して育たないと言い切った。

人に対してした「済まない事」とは何か。それは「非我」のレベルでは、日本が朝鮮、台湾を植民地化し、人の国の進路を妨げたということでしょう。言い換えれば、帝国主義的な拡張を遂げても決して豊かな未来はないという主張なのです。『ころ』における先生と奥さんの間には子供がいません。これも真に豊かな未来はないというメッセージにほかなりません。先生が下宿先の「御嬢さん」を奪い取ってしまう相手の頭文字が「K」であることは象徴的です。KはKoreaをイメージさせますね。先生は自分が自殺に至らせたKの墓に毎月詣でますが、それは韓国を併合したことへの漱石としての詫びであったともいえるでしょう。その点で先生は確かに明治時代そのものなのです。ですから先生は明治の終わりとともに自分の命を閉じねばならなかったのです。漱石は明治日本を葬り、若い「私」に遺書を託すことによって、若い「私」が生きて行く大正という時代に新しい展開、展望を託そうとしたのでしょう。ただ日本は『ころ』が書かれた直後に第一次世界大戦に参加し、この漱石の願いは叶えられませんでした。

漱石の生涯は49年という短いものでしたが、常に明治という近代日本を見つめながらその動向を愛情と批判を込めながら描き続けた。それによって現在もなお国民的作家として読まれ続けているのではないのでしょうか。以上

質 疑

Q：漱石は倫敦留学中資本論を読んでいたという話が有りますが、確かでしょうか？

A：『資本論』の英訳を漱石は所蔵していましたが、読んだ形跡はないようです。漱石自身がよく読んだのは心理学・哲学・社会学関係の本です。モーガンやジェームスといった哲学者の意識論に影響を受けています。人間を意識に流れの主体としてとらえる考え方でですね。その後愛読するようになるベルクソンも意識の流れの中に人間の存在があると考えた哲学者です。マックス・ノルダウの『退化論』もよく読んでいたようで、人間の自我と社会の関係には強い関心を持っていたことは間違いありません。またマルクスの考え方も知っていたようですが、『資本論』の内容への言及を漱石はおこなっていないので、実質的には読んでいないと思います。

Q：漱石というのはペンネームでしょうか。またどういう意味でしょうか。

A：「枕流漱石」という中国の諺から取っています。「枕流漱石」の意味は屁理屈をこねて自己を正当化する人のことです。枕石漱流が正しい言い方ですが、ある中国人が枕流漱石と書き間違えましたが、それを指摘されると、いやこの書き方が正しい。水を枕にしたら冷たくて気持ちがいい。石で口を注いだら歯が鍛えられて良いじゃないかと言って自分の間違いを認めなかったという古事によっています。漱石の性格に合っていますね。正岡子規も漱石を名乗ったことがあります。漱石は子規のペンネームを取ってしまったのです。子規は血を吐くまで啼くというホトトギスに因んで子規という雅号に落ち着きました。

Q: 明治初期ですと、小説家というのは戯作者とよばれて社会的地位が低かったと思いますが。森鷗外や漱石のようなエリートが小説を書くという社会的評価はどうだったのでしょうか。

A: それについて革命的な存在は坪内逍遙です。逍遙は東京大学の政治学科を卒業して小説家になった人です。それまでの小説は戯作者と呼ばれ単なる職人と見られていました。職人と見られていた小説家の地位を向上させたのは坪内逍遙と考えたほうがよいと思います。ただそうした見方はその後も持続していたので、漱石が東京帝大の先生から小説専業に転じたのも世間的に驚きでした。漱石自身朝日新聞入社の際で「大学屋も商売なら新聞屋も商売だ」と語っています。

漱石を迎え入れたのは朝日の戦略でした。当時は二流どころの新聞だった東京朝日は、マイナーな位置を脱却するため二葉亭四迷を迎え入れ、つづいて漱石を迎え入れたわけです。当時のジャーナリズムは自由民権崩れが行くところというやくざなイメージもありましたので、それを払拭するという意味もあったと思います。朝日新聞は現在でも漱石を様々な形で使っています。東京朝日は漱石に社主につぐ高給を払っていましたが、十分元は取ったといえるでしょう。

Q: 夏目漱石は強度の神経衰弱、胃潰瘍もあり、神経質で気難しいイメージですが、反面多くの門下生に慕われていて、芥川龍之介の面倒見た話もあり、相当気難しい人が門下生に慕われたのは何故でしょうか。

A: 面白い問題だと思います。人間は内面（うちづら）、外面（そとづら）がありますね。漱石は内面の悪い人です。外面は悪くなかった。木曜会を主宰して森田草平、寺田寅彦、小宮豊隆、芥川龍之介などの弟子を育てました。

一方森鷗外は内面の良い人で優しいお父さんであったようです。その様子は鷗外の作家となった娘たちが書いています。鷗外は家庭内で自分を形成しようとしていたようです。良い人であることを心掛けていたのです。対して夏目漱石は反対で、家庭内で暴力を振るうことも珍しくなかったことは長男の夏目伸六や奥さんの鏡子さんらの書いているとおりです。反面弟子達には結構我慢しています。森田草平などは面と向かって漱石を批判していますが漱石は我慢して付き合っています。家庭内では自制できないところがあつたようです。ただこれは生活者としての病的な問題ですから文学者レベルでは解明できませんね。家族に対して過酷だった作家と優しく作家がいます。森鷗外と夏目漱石がその好対照です。なぜそうだったかということは非常に興味のある問題ですからまた考えたいと思います。

以上

柴田 勝二（しばた しょうじ）先生のプロフィール

1956年兵庫県生まれ。1986年大阪大学大学院文学研究科（芸術学専攻）単位修得退学。山口大学人文学部講師、助教授などを経て現在東京外国語大学大学院国際日本学研究院教授。専門は日本近代文学。夏目漱石・森鷗外から三島由紀夫・大江健三郎・村上春樹に至る幅広い作家、文学現象を研究している。

主な著書

『私小説のたくらみ——自己を語る機構と物語の普遍性』（勉誠出版、2017年）

『夏目漱石 「われ」の行方』（世界思想社、2015年）

『三島由紀夫 作品に隠された自決への道』（祥伝社、2012年）

『村上春樹と夏目漱石——二人の国民作家が描いた〈日本〉』（祥伝社、2011年）

『中上健次と村上春樹——〈脱〉六〇年代的世界のゆくえ』（東京外国語大学出版会、2009年）

『漱石のなかの〈帝国〉——「国民作家」と近代日本』（翰林書房、2006年）

- 『〈作者〉をめぐる冒険——テキスト論を超えて』（新曜社、2004年）
『三島由紀夫 魅せられる精神』（おうふう、2001年）
『大江健三郎論——地上と彼岸』（有精堂出版、1992年）